メルロ=ポンティ研究

第16号

持続のリズムと
歴史のリズム——ベルクソン、ペギー、メルロ=ポンティの時間論　山下尚一 …1

「プラセボ反応」についての
ひとつの現象学的考察　重野豊隆 …15

時間経験と
看護実践の編成——新人看護師の実践に注目して　西村ユミ …27

痛みの
現象学——身体化された語り　稲原美苗 …41

看取りのケアと
間身体性　守田美奈子 …62

実存・無意識・制度
——メルロ=ポンティの正夢論の意義　廣瀬浩司 …75

メルロ=ポンティと
二分法　本郷　均 …87

2012年9月　メルロ=ポンティ・サークル

メルロ=ポンティ研究　第16号（二〇一二年九月）　メルロ=ポンティ・サークル

実存・無意識・制度

メルロ=ポンティの正夢論の意義

廣瀬浩司

はじめに

メルロ=ポンティ思想解釈の係争問題のひとつは、前期の『知覚の現象学』と後期の「新たな存在論」との関係である。とりわけ『見えるものと見えないもの』で彼自身が自己批判的なメモを残しているために、初期の知覚的意識の現象学が袋小路に陥った結果として、ハイデガー存在論への転回が行われたと考えられることも多かった。他方、ソシュールを旗印にした中期言語論・絵画論（「間接的言語と沈黙の声」）との関係、すなわち構造主義的な「差異」の思想や「他性」の思想（ラカン、レヴィナス）と存在論への転回の関係の評定も容易ではない。

幸い二〇〇三年に転記・出版された「受動性」についての講義ノートの冒頭でメルロ=ポンティは明快に『知覚の現象学』の問題点と以後の課題を提示している[IP, 174 et suiv.]。そこで本稿ではこの自己分析を念頭に置きつつ、まずは『知覚の現象学』の中でこの講義に密接に関る「性的存在としての身体」の章の要点を確認する。そのうえで前記の自己分析の意味を確認し、受動性講義における思索の深まりを探るため、フロイトの「ある正夢」という小論についての読解を検討する。

あらかじめ要点を示しておくならば、『知覚の現象学』から後期思想への橋渡しとなったのは「表現＝表出」の問題である。これは実存の超越の運動そのものであると同時に、身体図式や身体化の問題と密接に結びついている。後期思想

の出発点は、この表現行為に制度的厚みと、感性的・情動的な出来事の沈殿（無意識）の消し去りがたさを組み込み、心理学的記述では捉えきれないような新たな時間論・歴史論を、フッサールの『危機』書をモデルに現象学的に構想することにある。本稿では、実存の運動が「根源的創設」の「軸」、「象徴的マトリックス」といった用語で記述し直されることを重視し、無意識の領野の実践的・前望的・創造的な性格を強調する。このことがたとえば晩年のフーコーが模索していたような、権力関係的な相互主観性としての「セクシュアリティの装置」の肯定的な作動様態の分析と共鳴し、そこにおける制作的・制度化的主体の再定義にもつながることを示唆したい。

1 『知覚の現象学』における セクシュアリティ論

まずは『知覚の現象学』の「性的存在としての身体」の章を検討することで、初期のメルロ=ポンティの実存論的な無意識概念、セクシュアリティ概念の要点を確認する。

この章の第一の目的は、セクシュアリティ（現象としての性）を〈主知主義によるフロイト批判（無意識を意識の一様態と考える立場）〉と〈無意識の哲学（俗流フロイト主義の性決定論）〉」の対立の彼方において思考し、性的な存在を「世界における存在様態」の一つとして捉えることである。この視点から知覚は「エロス的知覚」として記述される。それは他者知覚が「性的図式」で裏打ちされ、世界が性的な「相貌」のもとに現れること、この世界に住み込む身体の身ぶりもそうした情動的総体を纏うことを示す。エロス的知覚は、知覚一般と同様、観念論的意識においてではなく、「世界」においてなされる。ここでメルロ=ポンティに特徴的なのは、性的図式が身体図式の一形態と考えられていることである。身体図式は自己と他者や世界とを媒介するが、これが欲望対象を中心に再組織されたものが性的図式である。

その一方でセクシュアリティは、認識や行為全体と相互表出の関係にある。この意味でエロス的知覚は、最下層の志向性や孤立した志向性ではなく、「実存」全体を蔽う。この場合「実存」という語は、心身の交通が理解されるような場、「たえざる身体化［incarnation perpétuelle］」によって重層化した場と理解され、性器的・器質的要因もこの場に組み込まれている。だから症候として現れる「意味」も多元決定されつつ、つねにひとりの主体の存在様態全体に存在根拠を持つ。「意味」はこの主体によって付与されるのでも外部から決定されるのでもなく、外部の出来事を主体がいかに「取り上げ直す＝回復する＝反復する［reprendre］」かに関るのである。

世界の意味の「地平」的な素描と、その「取り上げ直し」の相互関係の場が「表現＝表出」と呼ばれる。[2] たとえば失語症

からの脱出は一種の「回心[conversion]」であり、そのとき身体は実存全体においてみずからを取り集め直す。そうして身体は共存の地平にふたたび貫かれ、他者への開けを回復する。この身体が再び言葉を発するときも、記号が知的に概念化されるではなく、むしろ実存的な意味のほうが記号に住みつく。これが表現される意味であり、その言葉こそが「語るパロール」（表現と表現されるものの可逆性の制度化）である[PP. 193]。

こう理解されたセクシュアリティは、意識内容のひとつでも無意識的思考の産物でもない。それは一種の「雰囲気」として、匂いや音のように漂う地平である。だからたとえば夢において解放されるイマージュも、この雰囲気の結晶として散逸しながら、セクシュアリティの「典型的な関係」や世界の「情動的な相貌」を保持する。そしてそれらは身体において性的図式へと組織化され、経験の類型化を動機づける。他方主体は地平の偶然性をたえず「取り上げ直す」ことで、それを実存の運動全体と関係付け、それに意味を住みつかせる。これをメルロ=ポンティは「超越」とも呼ぶ。超越とは、実存が事実上の状況を勘定に入れ直し[reprendre à son compte]、その偶然性をたえず必然性へと変容させていく運動のことである。[◁3]

こうしてメルロ=ポンティは、エロス的知覚から出発し、それを取り巻く潜在的地平への超越の運動へと拡大する。この地平において実存とは、主体が置かれた事実的状況をたえず「表現」によって取り上げ直し続ける運動――より正確に言えば、そうした運動の場に住み込む実践が表現[◁4]――であり、それが前望的主体の「条件付けられた自由」[PP. 518]を保証する。後論を先取りして言うならば、後期思想の主眼は、この問題を延長しつつ、そもそもこの地平そのものがどのように「根源的に創設」されるのか、そしてとりわけ精神分析が問題にするような過去の出来事がどのような重み（消し去りがたさ）を持つのかを、より精細に考慮しながら前望的＝制度化的主体を組み立て直すことにあり、現象学的思考の枠組そのものは保持されていると思われる。[◁5]

2 「受動性」講義における自己分析

すでに述べたように、五四年度のコレージュ・ド・フランスでメルロ=ポンティは、「制度化」概念についての講義と「受動性」についての講義（眠り、夢、無意識、記憶の考察）を並行して行なっていた。ここで注目したいのはその「講義ノート」において、『知覚の現象学』がなぜ「誤解」されたかについて最も明確に記述していることである。彼によればこの「誤解」は以下の二点に基づく。

第一に、心理学的記述から始めるという選択による誤解。『知覚の現象学』は、当時の心理学によって記述される「現象

野」が「超越論的領野（時間性）」へとおのずと変容する過程を追うという方法を採っていた。その結果、客観主義的存在論を哲学的端緒とせざるをえず、たんなる「心理学的な詮索」「身体表象の人間学」と理解された。

第二に、知覚的な超越論的な領野を（科学主義と主知主義を含む）客観主義の残滓や例外として否定的に語ったため、超越論的領野が、科学的認識と対立するような直接的意識への回帰と理解され、非歴史的なものとみなされてしまった。

以上の誤解を払拭するため以下の課題が設定される。(一)知覚が「イデオロギー的・想像的・神話的・実践的・象徴的な諸領野」[IP 175]にどこまで規定されているかを研究し、ひとたび制度化されたものの歴史性、その厚みや重みを考慮すること（制度化概念講義）。(二)無意識的沈殿の他性・過去性を主体がどのように取り上げ直すかを主題化し、その受動性の特異性を明らかにすること（受動性講義）。

これらのどちらも「知覚」は意識への直接の現前ではなく、文化的・制度的な諸次元に媒介されていること、そして知覚対象の「地平」も漠然とした「雰囲気」や「充実性」[plénitude]ではないことを示唆する。それはまず、ある種の構造性や惰性を孕み、意識への直接現前をさまたげるような制度である。またそれは、内的な「差異」や「変容体」を含み、凹みやレリーフ、さらには「隆起」[IP 231]を持っているような、接触しがたいでこぼこの地平として考え直されなければならない[IP 174]。対象[objet]との認識論的関係とは異なる、世界との関係の新たな記述が模索されている。

3 フロイト「ある正夢」の分析

それでは受動性についての講義で、夢や無意識はどのように考えられるのか。『知覚の現象学』と対比したとき注目すべきは、メルロ=ポンティが「過去の経験の消し去りがたさ」を強調し、フロイトが「無時間的」で「不滅」だとした、夢や無意識の特異な時間性を現象学的に主題化していることである。ここではフロイトの「ある正夢[Eine erfüllte Traumahnung]」[GW-XVI121-23]という一八九九年の小論のコメントを取り上げる。まずはその概要を紹介しよう。

神経症でフロイトの治療を受けていたB夫人はかつて家庭医で友人でもあったK博士（K1とする）に出会う夢を見る。するとまさに夢で見たその場所で彼女はK博士に出会う。だがフロイトの分析によれば、この予知夢は、K博士に出会った後に事後的に再構成されたものである。そういう夢を見たという確信そのものが出会いの場で生まれ、過去に投影されたのである。その背景には、彼女が二五年前に病気の夫を看護の末に失って、音楽を教えながらかろうじて生計を立てていたときに出会った、別のK博士（K2とする）との束の間

の情事が関係している。このもうひとりのKは弁護士で、彼女が憧れに身を焦がしているときにドアを開けて登場した。実際に見た夢は、二五年を経て恋人に再会したいという欲望に色彩られたものであったのかもしれない。家庭医で友人であるK1に遭遇したとき、この人物が欲望の対象であるK2の「遮蔽物」となり、この友人と出会った夢を見たという確信が形作られた。これは、夢が意識へと貫通することを許可する「検閲」の働きの一形式だとフロイトは結論する。

この分析をメルロ=ポンティは以下のように再解釈する。

第一に指摘すべきことは、彼女に強い情動を与えた経験（K2の不意の訪れ）が、ある種の性的な一般性の地平を切り開くような、特権的な経験の制度化（「根源的創設[Ursiftung]」）[7]として、彼女の知覚装置の細部に消し去りがたいものとして組み込まれたことである。それがある「性的身体図式」を形成し、現在の他者知覚に重ね書きされ、二人のKが混同される下地となる。

フロイトはそこに「検閲」による虚偽の知覚の根拠を見て取る。だがメルロ=ポンティは「夢幻的なもの」が「虚偽」ではなくひとつの「現象」であること、夢に対する回顧的錯覚（予知夢だという印象）があくまで「知覚的意識の弁証法」に基礎付けられていることを強調する[IP 220]。問題はいわゆる虚偽意識ではなく、あくまで「知覚的意識」の変様なのである。すなわちフロイトは「真の知」である無意識と、その虚偽的なヴァージョンである意識を明確に区別したがゆえに、無意識の検閲や置き換えについて否定的に語らざるを得ない。[8]しかしメルロ=ポンティは「知でないような知覚的な接触（ただし、後で見るように、なんらかの内的な距離を排除しない接触）」として肯定的に無意識の介入を理解しようとする。するとこの夢はどのように解釈されるのか。

まず恋人K2が友人K1に「置き換え」られたのは、カムフラージュではなく、この友人との付き合いが、かつての愛人との恋愛期全体に結びついていたからであり、また、この友人との間にも恋愛に近い情動がなくはなかったからである。だからこの「置き換え」は「機械的連想」でも「第二の意識による総合」でもなく、二人の男を含んだ生活全体が一種の「一般性」（相互主観的地平）を形作っていたことを示す。

したがって正夢だという印象はK1と再会したいという欲望を隠蔽するものではない。それはむしろ「欲望された出会いの本質」を間接的に表出したものだとメルロ=ポンティは言う[IP 221]。かつてのK2との出会いが、ある相互主観的な制度を切り開く。この制度は、その創設の時点において、K2の分身——K2と同じであると同時にどこか違う存在——をみずから増殖させるような制度なのである。出会いの対象がかけがえのないものであるからこそ、それはみずからの一連の分身（差異をはらんだ変容体）を生産するような制度（ただしオリジナルだけは不在であるような制度）を開

く。このような分身生産の制度を形容するのには、「置き換え」といった言語主義的な比喩はふさわしくない。これはあくまで知覚の次元における、感覚的なものの鏡像的でおのずからなる二重化＝反復なのである。[9]

この根源的創設の本質の間接的表出のことをメルロ＝ポンティは、「一般性のシステム」の「表出のぶれ[bouge]」と形容する。K2との出会いを中心とする制度と、K1を中心とするよりゆるやかな制度は、わずかに中心をずらしながら重なり合っており、ここではK1の知覚をきっかけとしてK2を軸とする制度が呼び起こされている。かけがえのない他者との根源的な出会いは別の制度に組み込まれ、別の意味を纏いながらとどまり続けるのである。

たしかにかつての恋人との出会いは、もはやほとんど知覚できない記憶であるが、彼女の「世界のひそかな構造のなかに書き込まれて」おり、ちょっとした細部の知覚によって、ふと呼び起こされる[ib.]。根源的な出会いは、別の偶然の出会いに、同じようであると同時にわずかに異なった意味の必然性を与えるような領野の創設であり、ほとんど知覚不可能でありながら、あくまで知覚的領野の一部をなすような、たえず反復される創設である。このようにみずから変容しながらとどまり続けるものの時間性をメルロ＝ポンティは「実存的永遠性」[VI, 229]とも呼ぶ。それは理念的なものの永遠性ではなく、生の諸次元を横断し、変容・反復される非概念的な意味の永遠性である。

そして『知覚の現象学』と同様、この根源的創設は身体図式に書き込まれている。この身体的記憶が可能になるためには、彼女自身の身体が根源的な出会いを受容しうるような傷つきやすいものであり、[10]そして制度の構成要素でも動作主でもあるような存在として、受動的かつ能動的に組み込まれていなければならない。そのときはじめて、彼女の身体意識は制度の「ぶれ」における多数の関係の「共鳴体[résonateur]」[IP, 236]となりながら、他者たちの制度を分身たちの制度として創設する。友人との出会いは「ある[身体の]組み立て(モンタージュ)に接触し、そこにこだまを響かせたのだ」[IP, 222]。

この世界において、すべての他者は――現実の他者であろうと、想像上の他者であろうと――、「夢のように」[11]現前し、相互に表出し合う分身たちである。とはいえ、すべてが夢だというのではない。重要なことは、この分身たちが作る制度が「知覚(現実)」と「想像」とのサルトル的な区別とは無縁な構造体であるということである。それはあくまで根源的出会いの偶然性に結びついた事実性であるとともに、かけがえのない他者の想像的分身だけが必然的・運命的な現象として現れるような、独自の知覚制度なのである。

このような知覚制度のことをメルロ＝ポンティは「象徴的マトリックス」[12]と呼ぶ。象徴的というのは、この制度こそが、彼女の他者たちとの関係につねになんらかの「意味」を住み

込ませるようなダイナミックな枠組だからである。象徴的マトリックスとは、構造主義的な置き換えの場ではなく、根源的な創設によって組み立てられ、それを感覚的な身体を媒介に、たえず別のかたちで共鳴させ続けるような装置である。こうしてメルロ=ポンティは「雰囲気」として記述されていた地平を「象徴的マトリックス」と呼ぶ。この言い換えは何を意味するのか。

第一に強調すべきは、メルロ=ポンティが性的な地平を、たんに心理学的に記述するのではなく、それがいかに創設され、現在の知覚野に残存しているかを主題化していることである。このような働きをメルロ=ポンティは「軸[pivot]」という独自の用語で主題化する。たとえば「欲望は、別の夢において、軸としての知覚」の役割を演じ、「テレパシーや予知の印象に道を開く」とメルロ=ポンティは言う[13][IP, 219-220]。恋人との情事という偶然の出来事は、超越の運動により潜在的・一般的な領野へと開かれる。するとこの開けが軸となり、彼女の生をある様式(スタイル)で構造化したり、歪めたり、方向付けたりする。しかしその軸を創設した出来事の意識内容は忘却される。より正確に言えばそれは、みずからを忘却する運動(分身を生産する運動)において作動する。したがって軸とは、十全に知覚されるものでもなく、何かの背後に隠されたものでもない。「無意識とは何か。軸として働くもの、実存範疇であり、その意味で知覚されていると同時に知覚されていないものである」[VI, 243]。このように知覚の領野に含まれた見えないもの、あるいは、見えるものに住みつく見えないものへの開けこそが、無意識的な「軸」として対象の現れを可能にする。この軸の記述によってメルロ=ポンティは、心理学的な記述から脱却し、雰囲気と呼ばれていたものをひそかに支え続ける「根源的創設」を主題化したのである。

したがってこの「軸」の知覚は現前・不在の対立を逃れ去る。あえて言うならば無意識とは〈根源的に現前しないもの〉が、それ自体が創設する制度を媒介に、間接的に現前するプロセスのことにほかならない。軸による知覚とは、現実のものであれ、夢幻的なものであれ、この制度を媒介にした距離を孕んだ知覚、すなわち「遠隔-視覚[14][éclé-vision]」である。

フロイトは、抑圧されたものは接近不可能であるがゆえに、傷つけられないまま残り続け、その抑圧の審級そのものが回帰の媒体となると考えた[cf. IP, 227]。それに対しメルロ=ポンティはそこに距離を孕んだ知覚を見て取る。つまり欲望された対象に対する「距離[éclé-]」こそが、その分身の現れる場であるとともに、(制度の細部を通した)対象への接触の場なのだ。このような「距離を孕んだ一致」「部分的一致」の距離や断片性をたんなる否定的なもの(抑圧された無時間的なもの)としてではなく、制度を支える軸として肯定的に捉え返すことこそが後期思想の主題なのではないか。つまり無意識とはなんらかの欠如的・否定的な表象ではなく、むしろ感覚

的なものの厚みがおのずと意味を孕みながら、重層化していくプロセスである。[15] この「軸」は新たな情動的対象との遭遇をきっかけとして、つねにみずからずれてゆくことによって、制度全体を組み替える。このわずかなずれこそが、知覚世界全体にこだまを響かせ、新たな経験に意味を与え続け、根源的創設を反復するからだ。

このような議論が時間論的な意義を持っていることは明らかであるが、そこに踏み込むことはできない。ここで指摘できることは、「現在」の知覚的領野は、過去と未来が、無意識を軸にして交叉する場、あるいは根源的過去を未来に投企すると同時にただちに取り上げ直すような場であり、それらの厚みをはらんで垂直に立ち上がるような「次元的現在」[VI. 297]であるということだ。「無意識は、私たちの奥底や「意識」の背後にではなく、私たちの前に、私たちの領野の分節化として探求されるべきだ。それが「無意識」なのは対象ではないからである。それは、それによって諸対象が可能になるようなものであり、布置であって、そこに私たちの未来が読みとられる」[VI. 234]。このように無意識とは、私たちの現前野の「分節化」としてありながら、無時間的で不滅の象徴界をかたちづくるのではなく、むしろ過去の出来事の根源的創設をたえず再活性化しながら、それを未来の別の意味へと変容させるような、前望的で垂直的な時間的なプロセスなのである。

4 まとめと問題提起

六〇年代の構造主義は、実存思想の人間学的側面を標的とした。しかしメルロ=ポンティの思想転回はこのような皮相な思想史的な図式からは逃れている。彼の初期思想において、人間的な行為はつねに非人間的な地平、雰囲気として広がる一般性の地平に取り囲まれている。他方「自由」とは、この非人間的な地平を「取り上げ直し」、それをいわば未来へと投げ出すこと、そして投げ出されたものをすぐさま取り上げ直す絶えざる運動性にある。したがって彼が構造主義的思考に接近することがあったとしても、それはあくまでこの「地平的先取り」とその「取り上げ直し」の交叉をより精密に踏査し、そこにおけるずれの契機を肯定的に含むような現象学的時間論を練り上げるためにほかならない。言いかえるならば、象徴的制度が非人間的なものとして自立してしまうこと、つまりひとたび打ち立てられた制度が、たちまち堕落して退行してしまう遡行的運動を組み込みうるような、厚みを持った現在の時間経験を主題化することが晩年の存在論の課題であった。

このことと相関的に「象徴的マトリックス」は純粋に人間的でも非人間的でもなく、言語的でも身体的でもない意味生

産装置であり、制度の変容の原理である。身体もまたこの装置に組み込まれ、刺し貫かれ、傷つき、応答し、この傷を新たな意味に変容させる。言いかえるならば、制度の生成を捉えること、すなわち、制度からたえず逃れようとする「野生の存在」を、制度自身が取り上げ直し、意味へと生成させる運動をひとつひとつ取り上げ直すことなのだ。

かつてジル・ドゥルーズは「現実界」「想像界」に加えて、「象徴界」という領域を付加したことが構造主義の特質であるとした。[16] メルロ=ポンティはサルトル的な「知覚（現実）」と「想像」の区別をとりわけ後期に全面否定し、両者の相互浸透を強調する。その一方で構造主義が語る象徴界の優位、死のまなざし、象徴界の穴（ラカン）、超自我的な審級やイデオロギー的呼びかけの内面化（アルチュセール）といった言語・社会制度を前提した議論には同意しないだろう。メルロ=ポンティはむしろ「現実」と「夢幻的な世界」が絡み合う世界を暴き出すと同時に、それを支えるほとんど知覚できないような「軸」のおのずからなる現れを、ある世界の「根源的な創設」の痕跡として読み取り、それを実践的な表現行為（たとえば「語る」という行為）によって意味へともたらすことを目ざすのである。

最後に付け加えるならば、初期のビンスワンガーの著作への序論で、サルトルのイマージュ論を批判しながら表現論に現象学の拡張の可能性を模索し、晩年に「実存の技法」の思想を提唱していたフーコーの思想とは、その対象が歴史であったという相違を越え、また彼自身の現象学批判を越えて、メルロ=ポンティとの生産的な突き合わせが有効だと思われる。たとえばメルロ=ポンティのいう象徴的マトリックスを、身体を内と外から触発するひとつの「セクシュアリティの装置」（『性の歴史　第一巻』）という権力諸関係（非抑圧的で、双方向的で、動的で闘争的だが、多義的な意味を生産する「変形のマトリックス」）と考え、身体をその装置の一要素でもあり、動作主でもあり、対象でもあるもの（cf.『監獄の誕生』のパノプティコンにおける囚人の位置）と考えることもできる。そしてそのような特異な行為の「様式（スタイル）」の歴史こそが晩年のフーコーが「実存の技法」の歴史と呼んだものであり、[17]「主体化」の歴史でもあるのではないか。両者を統合したかたちで「権力関係における身体装置の現象学」「夢幻的身体の政治的系譜学」[18]を構想することもできるだろう。[19]

（追記。本稿は「実存思想協会」春の研究会シンポジウム、東京大学、二〇一二年三月二六日の発表原稿を加筆訂正したものであり、科学研究費補助金「基盤研究（B）」（20320007）の研究成果の一部である。）

註

▽1　「沈黙のコギトはもちろんこのような問題を解決しない。私が『知覚の現象学』でしたようなかたちでそれを開示しても解決には至らない（コギトについての章は言語についての章に結びつけられていない。反対に私はひとつの問題を提起したのだ）[VI, 299]。「『知覚の現象学』で提起された問題は、私が「意識」と「対象」という区別から出発したために解決不可能である」[VI, 253]。以下メルロ=ポンティの引用にあたっては以下の略号を使用する。**IP** : *L'Institution/La passivité, Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Paris, Belin, 2003 ; **PP** : *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945; **RC** : *Résumés de cours (Collège de France 1952-1960)*, Paris, Gallimard, 1968.; **VI** : *Le visible et l'invisible*, Paris, Gallimard, 1964（ただしPPとVIの現行のcoll. « Tel »のヴァージョンでは頁数が異なっている）。

▽2　ミシェル・フーコーは一九五四年のビンスワンガー「夢と実存」への序文において「おそらく、表現の哲学というものは、現象学を越え出ることによってしか可能ではないだろう」と述べる[Michel Foucault, *Dits et écrits, I*, Paris, Gallimard, p.78.]。この序文は、表現の哲学の強調やサルトルのイメージ論批判などにおいて顕著なように、メルロ=ポンティ思想の影響の下に執筆されている。以下註においてフーコーとの関係を指示する。

▽3　フーコー前掲書「夢はその超越のうちで、そしてその超越によって、ぬきがたい孤独のうちにある実存が一つの世界へおのれを企投し、その世界がその歴史の場として構成されることになる原初の運動をあらわにする[…]。世界へ向かう自由の運動と、自由がおのれの世界を手にいれるための原初の出発点とをあらわにするのだ」[*ibid.*, p.90-91]。

▽4　五三年度講義「感覚的世界と表現の世界」の講義準備ノートにおいてメルロ=ポンティは「表現」ないしは「表現性」を「ある現象が、その内的な配置[agencement]によって、存在しない別の現象、さらには決して与えられなかった別の現象を認識させる属性」と定義する。そして「道具や作品は、事物さらには世界について語ることで人間を表現する」こと、したがって「人間が生産物において自己表現する」ばかりではなく、「生産物のほうが世界を表現し、人間はこの関係の現れによって確証される」という[*Le monde sensible et le monde de l'expression, Cours au Collège de France, Notes, 1953*, Genève, 2011, MetisPresses, pp. 48]。表現と表現された世界の関係こそが「人間」の場なのである。

▽5　『知覚の現象学』の出版後の四六年に行われた学会でジャン・イポリットは「知覚の記述」と「意味の存在論」の関係付けの弱さを指摘し、続いてボーフレはハイデガー的問題系への移行を慫慂した[*Le primat de la perception*, Lagrasse, 1996, pp. 97-103]。しかしメルロ=ポンティは前掲講義でイポリットの指摘に反批判し、自分にとって存在論と現象学には区別はなく、『存在と時間』の心理学と存在論の区別は「形式主義」に至ると記す。*Le monde sensible et le monde de*

l'expression, pp.46-47.

▽6　他にメルロ=ポンティは、「あるヒステリー分析の断片（症例ドーラ）」、「妄想と夢（イェンゼン『グラディーヴァ』論）」『日常生活の精神病理学』『夢判断』なども分析しているが字数の事情により割愛する。

▽7　この用語はフッサール『危機』書とりわけ「幾何学の起源」から借用され、メルロ=ポンティ思想に次第に深く組み込まれつつ自由に展開されていく操作的概念である。

▽8　これはフーコーが『性の歴史　第一巻』で「抑圧の仮説」を批判し、権力をあくまで肯定的なものとして考察することと関係する。もちろんメルロ=ポンティ自身は「抑圧」の用語を保持しているが、この概念の否定的側面の批判をみることも可能である。その意味では、ここでは取り扱えない「『グラディーヴァ』論」が重要である。そこでは無意識がたんなる「暗黙の思考」でないことが強調されているからである［IP, 229］。（澤田哲生氏の御教示による。）

▽9　「置き換え：置き換えというよりは二重化であり、遮蔽的・隠蔽的な人物というよりは、分身、ぶれと呼ぶべきであろう」［IP, 240］。

▽10　「無意識とは、行為する私の機構に、知覚されたものが挿入されることである」［IP, 230］。身体図式とりわけ性的な身体図式を論じるにあたり、次第に重要性を増していくのはP・シルダーの著作である。「シルダーの実験。到達し得ないものが規範として住み込み、私たちの身体を所有し、その運動を指示するのは、まさにその到達不可能なものが欲望され、抑圧されたからである」［IP, 231］。こうした身体図式の傷つきやすさが「外傷的主体の哲学」につながることについては拙論「野生の世界の風景と出来事の暴力」『思想』（岩波書店）、一〇一五号、二〇〇八年、十一月、二一－二二頁を参照いただければ幸いである。

▽11　「覚醒時の事物との関係、そしてとりわけ他者たちとの関係は、原理的に夢幻的な性格を持っている。他者たちは夢のように、神話のように私たちに現前する。そのことだけで現実的なものと想像的なものの区別を疑問視するに十分である」［RC, 69］。

▽12　「無意識とは、出来事によって残された象徴的マトリックスである。出来事への回帰、分析、Deutung［予知的解釈］は、この織地をほどくが、それが有効なのは、発生的な出来事が、体験されたままのかたちで真に再発見されたときであり、抽象的に定式化されたときではない。無意識とは実存的永遠であり、生の凝集であり、出来事の豊饒性である」［IP, 223］。

▽13　『見えるものと見えないもの』においてメルロ=ポンティは、テレパシーを身体の可視性に関係付ける。「身体を持つこと、それは見られることだ（それだけではないが）。それは可視的な存在であることである。ここでテレパシーやオカルト的なものの印象が生じる＝それは他人の視線を稲妻のようにすばやく読み取るときの生動性である――読み取りというべきだろか。反対にこのような現象こそが、読み取りを理解させてくれるのだ［VI, 233］」。身体が可視的であること、それは他者による「距離を孕んだ視線」（＝部分的・瞬間的であると同時に一般的・持続的な視線）にさらされることであ

る。それは言語的な段階以前になされるが、「視線の読み取り」という言語的な取り上げ直しを可能にするものでもある［cf. VI, 299］。

▽14　「視覚とは遠隔－視覚、超越、不可能なものの結晶化である」［VI, 327］。

▽15　Renaud Barbarasはメルロ=ポンティ的な知覚論の延長上に「主観性が根源的に欲望であるからこそ、私たちにとって対象がありうる」という立場から欲望の現象学を展開した。その議論は当然私たちの議論と多くの交点を持つが、バルバラスが欲望を「異他触発」としての「生」へと関係付けるのに対し、私たちはそこに意味の根源的創設の場、すなわち制度的諸次元が畳み込まれていく場を見る。Renaud Barbaras, « Le désir comme essence de la subjectivité », *Le désir et la distance*, Paris, Vrin, 2006, pp. 136, 154.

▽16　Gilles Deleuze, « A quoi reconnaît-on le structuralisme », *L'île déserte et autres textes*, Paris, Minuit, 2002, pp. 239 et suiv.

▽17　この点についてはフーコー『性の歴史　第三巻』における、アルテミドロス『夢を解く鍵』の分析が示唆的である。そこでフーコーは、（予知）夢の分析が対象とするのは「夢の場面の中で、性行為を行なう者が夢を見る本人をあらわすかぎりでの、そうした行為者」であること、そして夢がこの主体の「魂に変化を与え、魂を加工し、魂に形を与える」ことを強調する。また夢が指示する倫理は、外在的な規範とは無縁な、夢における主体の行動様式（受動的か能動的かなど）に基づくという［Michel Foucault, *Histoire de la sexualité III*, Paris, Gallimard, 1984, pp. 19, 27, 50］。ここにもメルロ=ポンティ的主体の影が感じられる。

▽18　「この研究の目的は、いかにして権力の諸装置が、直接に身体に関係付けられるのか――具体的なさまざまの身体に、機能に、生理的プロセスに、感覚に、快楽に関係付けられるのかを明らかにすることである」［Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I*, Paris, Gallimard, coll. « Tel », p.200］。この意味でフーコーの性の歴史は、身体表象、そのイデオロギー、心性史などではなく、あくまで感覚的身体を動作主でもあり対象ともするような、可変的なシステム（象徴的マトリックス）の研究であるが、フーコーの社会思想的・イデオロギー論的読解の多くはこれを読み飛ばしている。

▽19　そもそも、冒頭に紹介した『知覚の現象学』の「性的存在としての身体」でたえずその政治的含意（性決定論と経済決定論との重ね合わせ）が示唆されていたことを想起してもよいだろう。この章の直後には経済決定論の批判が長い注として付けられていた。この論点にかかわる論考として澤田哲生「政治の病理学」［『メルロ=ポンティ研究』第一四号、三九－五五頁］およびバトラー、イリガライのフェミニズムを越える論点をメルロ=ポンティに剔抉した論考として齋藤瞳「自然としての身体、文化としての身体」［同誌、八四－九八頁］の参照が必須である。

▽4　ポランニー、M（1966）、高橋勇夫訳（二〇〇三）、『暗黙知の次元』、筑摩書房。

▽5　佐藤紀子、二〇〇七、『看護師の臨床の知――看護職生涯発達学の視点から』、医学書院。

▽6　正木治恵、二〇〇七、『糖尿病看護の実践知――事例からの学びを共有するために』、医学書院。

▽7　Benner, P., Hooper, Kyriakidis, P.L., Stannard, D.（1999）、井上智子訳（二〇〇五）、『看護ケアの臨床知――行動しつつ考えること』、医学書院。

▽8　西村ユミ、二〇一一、「看護ケアの実践知」、『看護研究』、四四（一）、四九－六二頁。

▽9　キューブラ、K・K、ベリー、P・H、ハイドリッヒ、D・E（2002）、鳥羽研二（二〇〇七）、『エンドオブライフ・ケア』、医学書院、三〇頁。

▽10　武見綾子、二〇〇七、「緩和ケア病棟の看護師が「言葉を失う」体験」、日本赤十字看護大学大学院看護学研究科修士論文、三七－四〇頁。

▽11　メルロ=ポンティ、M（1945a）、竹内芳郎・小木貞孝共訳（一九七四）、『知覚の現象学1』、みすず書房、一二六頁。

▽12　西村ユミ、二〇〇七、『語りかける身体――看護ケアの現象学』、ゆみる出版。

▽13　メルロ=ポンティ、M（1945b）、竹内芳郎。木田元・宮本忠雄共訳（一九七四）、『知覚の現象学2』、みすず書房、四〇九頁。

▽14　前掲書、三〇五頁。

Les études merleau-pontiennes

No. 16

Shoichi YAMASHITA Rythme de la durée et rythme de l'histoire : la temporalité chez Bergson, Péguy et Merleau-Ponty 1

SHIGENO Toyotaka A Phenomenological Reflection on "Placebo Response" 15

Yumi Nishimura Experience of time and the structure of nursing practice - A focus on nursing practice by new nurses 27

M.Inahara Phenomenology of Pain: Towards Embodied Narratives 41

Minako Morita End-of-life care and Intercorporeality 62

Koji HIROSE Existence, inconscient, institution - La portée de la réflexion sur le rêve prémonitoire chez Merleau-Ponty 75

HONGO, Hitoshi La dichotomie et Merleau-Ponty 87

september 2012

Edited by

MERLEAU-PONTY CIRCLE

Kobe Japan